

# 学生諸君に告ぐ

学長：柳沢 幸治

本学は設立以来、広い教養と高い専門性により全国に有能なる人材を提供すると共に、地域社会の発展に寄与してきた。さらに近年では、他大学にはない高い就職率と、多くの編入学生を送り出すノウハウを蓄積し、他学からも多くの注目を集めている。

このような広い教養や高い専門性、さらには就職・編入に関するノウハウを教授するには **Face to Face** による授業がベストであることは論を待たない。本学が4月以降3回にもわたり授業開始を延期してきた背景には、学生諸君の理解度を掌握し、より質の高い授業を教授したいという教員の意向が働いたことをご理解いただけるのではないだろうか。他大学の多くが早い段階で遠隔授業に切り替えたことと異なり、本学は「学生の学び」を非常に大切にしているのである。

しかし、新型コロナウイルス感染症は面接（対面）授業を許さなかった。学生諸君や教職員の健康・安全を考慮するならば、面接授業では健康・安全の担保を保証するものではないのである。さらに、本学は全国より学生が集まるため、その危険性も高まる可能性が高い。

だが、このような非常事態であっても「学生諸君の学び」に停滞を起こすわけにはいかない。しかも、授業の質は落とせない。このような1ヶ月間にわたる葛藤の末たどり着いたのが **Teams** による遠隔授業である。面接授業と比べてベストではないが、よりベターであることは確信をもっていえる。多少の不便を感じるかもしれないが、積極的に活用して欲しい。

さて諸君らは、「学生」である。これまでの生徒とは異なる。生徒は、親や教員の指導にしたがい、自らの主体性をあまり発揮できる立場にはなかった。そのため、到達目標に到達しなくとも許されてことが多かったのではないだろうか。

だが、「学生」は違う。自ら考え、自ら決定し、その責任は自らが背負わなくてはならない。「どの授業を取り」、「どのような時間割にするか」を自分で決定しなければならない。そして、その選択した授業でさえ、自らが「受ける・受けない」を決定できるのである。

そのように考えるならば、今回のコロナによる災害は、学生諸君には新たな試練を課しているといえよう。なぜなら、通常の授業においては「サボりたい・ドロップアウトしたい」という欲求を、教室という箱物、教員・学友という環境が抑止力となって働いている。しかし、遠隔授業においては、このような抑止力は働かない。

今後、パソコンの前に「いる・いない」、授業を「聞く・聞かない」を決定するのは君たち自身である。まさにコロナは、学生諸君の「精神力・忍耐力・人間性」さらには「将来の可能性」を試しているといえよう。

自らを律し、自らの欲求を抑え、最後まで授業を受講した先に、新たな地平が見えて来ることは間違いない。後期の授業において、一回り成長した学生諸君の姿を見ることが出来ることを特に希求するものである。